

源氏物語の たのしみかた



運営・司会：横井 孝氏
実践女子大学 文学部 国文学科 教授

日本の代表的な古典文学であり、千年の時を超えて今も読み継がれている『源氏物語』。今年度の国文学科ではこの文学作品に焦点を当て、展覧会と、2回の講演会、ワークショップを行いました。展覧会では香雪記念資料館に源氏物語古筆切を展示。講演会では研究者のほか香道・能の第一人者を招き、さまざまな角度から源氏物語を見つめました。二回にわたって行われたワークショップでは、ご参加の皆様に変体仮名の解説を通じて源氏物語に親しんでいただきました。

第1回講演会：10月14日 [土]

江戸時代の源氏物語

江戸時代の人々にとって源氏物語はどのような存在だったのか、どのような形で親しまれていたのか。また、源氏物語に詳しいのはどのような人だったのかについて、本学教員が紐解きました。

■挿絵付き本やあらすじ本などで 源氏物語に親しんだ江戸の人々

源氏物語は1008年頃に成立されたとされています。江戸時代(1600~1800年代)の人たちにとっても、現代人と同様、源氏物語は古典作品で、原典で読むことは難しかったようです。

江戸時代の人はどうやって源氏物語に親しんだのでしょうか。挿絵をつけたりあらすじをまとめたり(梗概)、その時代の言葉に直したものとかがありました。1612年、土佐派の絵師・土佐光吉の挿絵で『源氏物語手鑑』がつくられます。1654年には『絵入源氏物語』(山本春正)が刊行されます。同時期、俳人・雑谷立圃による絵入梗概本『十帖源氏』がつけられました。なぜ俳人が源氏物語の梗概本を出せるのか。俳諧や連歌には百韻という形式があり、その中に源氏物語の巻名を組み込むものがあります。従って、俳諧や連歌に携わる人は源氏物語を知っておく必要がありました。

源氏物語は着物の意匠にも用いられました。1718年には、『西川ひな形』(西川祐信)という図案集が刊行されています。しかし、多くの人はその図柄の意味を理解できなければ意味がないため、意匠に用いられるのは源氏物語の中でも特に有名な、特定の場面だけでした。つまり、江戸時代の人々の多くは梗概本などを通じて、源氏物語を代表する場面についての知識を持ちイメージを共有できたことがわかります。源氏物語のモチーフは浮世絵にも使われましたが、これも作品の代表的な場面について共通の理解があったからこそものと考えられます。

1829年には『偽紫田舎源氏』(柳亭種彦作・歌川国貞画)の初編が刊行され、源氏物語ブームを巻き起こします。これは源氏物語の基本的な情報をベースにして書かれており、読むと源氏物語を知った気分になれるものです。一方、菱川師宣の『源氏大和絵鑑』で、光源氏が本来不倶戴天の敵である弘徽殿女御に恋をしたと書かれるなど、明らかな誤りが見られるものもあります。しかし当時、江戸の人の多くは代表的な場面のイメージしか持っていなかったため、不思議に思われることがなかったのでしょう。

結局、ごく一部の人がだけが源氏物語を読みこなして、多くの人にとって源氏物語とはなんとなくのイメージはあるものの身近な存在ではなかったのではないかと考えられます。



▲江戸時代の人々に親しまれた挿絵本などを紹介しながら講演。

源氏物語の和歌

源氏物語の作中人物が詠んだ和歌795首のうち六条御息所の歌を例に取り上げ、作中の和歌がどのような背景のもとで生まれたか、またそれが当事者のどのような心情を表すものだったかを解説されました。

■さまざまな背景から、歌に込められた 六条御息所の切ない心情に触れる

源氏物語の中では、光源氏を始め多くの登場人物が和歌を詠んでいます。今回は登場人物の中で六条御息所に焦点を当て、彼女が作中で初めて読んだ独詠歌を手掛かりに、和歌を通じて見る六条御息所像を探り、また和歌の分析や源氏物語中の和歌を読む時にはこういう視点があってもいいのではないかと、という話をしたいと思います。

取り上げるのは『葵』の巻に登場する六条御息所の独詠歌、「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる」です。これは、賀茂祭での見物場所をめぐって光源氏の正妻・葵上の一行といさかいを起こす「車争い」の場面の後に詠まれたものです。

この歌のキーワードとなる、「影を」や「みたらし川のつれなきに」という言葉は、その前の文中にある「笹の隈にだにあらねばにや」「つれなく過ぎ給ふ」に関わるといわれています。このくだりは、古今和歌集の1080番歌「ささの隈の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」を踏まえて書かれているのではないかとされています。この歌は神楽歌で、天皇が即位した際の祭の時に新帝を祝うものです。また、万葉集にも同様の歌「さ檜隈川に馬留め馬に水かへ我よそに見む」があります。こうした背景を踏まえることで、六条御息所の独詠歌に、「光源氏様のお姿を車の陰から、少しでもいいから拝見したい」という心情を窺うことができます。

また、「つれなき」という歌言葉は、古今和歌集の809番歌「つれなきを今は恋ひじと思へども心弱くも落つる涙かな」という、男女の関係が切れた段階の歌などにも見ることができます。『帚木』の巻で、逢瀬の後に光源氏が空蝉に送った歌「つれなきを恨みも果てぬしのめにとりあへぬまで驚かすらむ」にも見られます。読者は光源氏と空蝉のやり取りも踏まえ、六条御息所の歌を読むことになります。物語が紡ぎ出されている中で、光源氏と空蝉の贈答歌や、万葉集・古今和歌集の表現世界を受けて、六条御息所のこの独詠歌が成立しているということが言えます。

現代を生きる私たちにとって「源氏物語をどう読むか」は難しい問いではありますが、和歌を起点として読むことも、この物語に触れる楽しさの一つなのかもしれません。



講師：針本 正行氏
國學院大學 教授



▲常盤祭の中で開催され、多くの参加者が集まりました。

三條西家と源氏物語、そしてお香

室町時代の源氏学の家として、後世にも大きな影響を及ぼした三條西家。御家流香道宗家でもある三條西家の堯水氏に、三條西家と源氏物語、また香道と源氏物語についてお話していただきました。

■代々、源氏物語を研究してきた三條西家。その知見は香道にも組み込まれる

三條西家は公家で、藤原北家の流れを引いています。支流は、藤原道長の叔父・公季に始まる閑院流です。三條西家と源氏物語の関わりを紐解くと、室町時代に三條西家に生まれ、歌人としても名を成した実隆が、非常に多くの源氏物語写本をつくっています。中には、明治時代になって源氏物語を出版する際、元になったとされているものもあります。また、実隆は源氏物語の系図もつくっています。実隆の子・公条、またその子・実枝も、源氏物語の講釈で有名でした。

実隆は香道・御家流の祖ともなりました。香道とは、炊いた香木の香りを聞いて(=かくごと)鑑賞する芸事です。「聞香炉」と呼ばれる器に灰と火のついた炭団を入れ、その上に香木を乗せたものを参加者に回し、各自が香りを聞いていきます。香道は、今から500年ほど前に発足したとされています。

香を楽しむことは古くから行われていますが、香道は源氏物語が書かれた時期より後にできたため、源氏物語には登場しません。しかし、香道の楽しみ方の一つに、複数の聞香炉を回し香りの違いを当てる「組香」があり、その中に源氏物語を利用した「源氏香」というものがあります。52通りある答えが、源氏物語のうち『桐壺』『夢の浮橋』を抜いた52の巻名となっており、参加者は自分の答えがどの巻名に当たるのかを照合して回答します。

組香には「証歌」という、その香りの主題となる和歌が添えられますが、源氏香には当初、これがありませんでした。後年、御家流で源氏香の証歌を定めますが、その際、実隆が源氏物語54帖のそれぞれについて詠んだ歌が当てられました。源氏物語に登場するものではなく実隆の歌を採ったのは、三條西家が代々、源氏物語の研究をしていた家柄であることによります。



▲聞香の作法についても解説があり、会場内に聞香炉が回されました。



講師：三條西 堯水氏
御家流香道第23代宗家

源氏物語と能

日本の古典芸能・能の演目にも源氏物語をモチーフとしたものが見られます。宝生流能楽師として活躍中の佐野弘宜氏に解説していただくとともに、講演の最後には講師による能が披露されました。

■源氏物語に関わる演目の多くは、さまざまな趣向のもとで成り立つ

能は、大陸から渡ってきた散楽という芸能をルーツとしています。散楽は物まねや曲芸などからなり、現在の能とはかけ離れたものでしたが、時代を経るにつれて洗練されていき、ドラマの要素などもついていきました。そして室町時代に登場した観阿弥・世阿弥親子によって、現在の能・狂言として大成しました。能と狂言には、前者がドラマの要素、後者が滑稽物の要素をそれぞれ押し出したもの、という違いがあります。

能で現在上演される演目は250曲ほどありますが、源氏物語を題材としたものは、僧侶の夢に夕顔の霊が現れる『半蔀』、葵上に取り憑いた六条御息所の生霊が修験者によって折り伏せられる『葵上』、その後日談でもある『野宮』などがあるものの、実はそれほど多くはありません。また、源氏物語の原本からつくられた演目はほとんどなく、脚色されたり後日談としての創作だったり、というものが多くなっています。

このうち、最も人気がある『葵上』について掘り下げましょう。舞台の上一枚の着物が広げられ、葵上が病に伏せている様子が表現されます。何をしても治らないのでこれは物の怪に取り憑かれたのではないかと、朱雀院の臣下が照日の巫女に占わせると、六条御息所の霊が、車争いの因縁による破れ車(壊れた車)に乗って現れます。感情をあらわに、恨み言を述べる六条御息所に慌てた朱雀院の臣下は、法力を持つ横川の小聖によって彼女の調伏を試みます。

六条御息所を主役にしたという点がこの演目の特徴で、原作である源氏物語とは異なる視点、演出で描きたいという意図があったのかもしれない。仏教的な世界観も伺えます。能の『葵上』は、世阿弥が手を加えたものと言われています。



講師：佐野 弘宜氏
宝生流能楽師



▲本学教員 影山輝國と学生が地謡を務め、能の実演が行われました。

ワークショップ：10月6日[金]・27日[金]

展覧会：10月2日[月]～28日[土] ※8日[日]を除く

変体仮名で楽しむ源氏物語の世界

講師：上野 英子(実践女子大学 文芸資料研究所 教授)

本学教員が、展示資料などを中心に変体仮名を解説し、ご参加の皆様を源氏物語の世界へご案内しました。「公家たちの源氏物語」「武将たちの源氏物語」と題し、2回のワークショップが行われました。



▲変体仮名や古筆切について参加者に理解を深めていただいた後、実際に古筆切を読む時間が設けられました。

古筆切で楽しむ源氏物語の世界

場所：実践女子大学渋谷キャンパス 創立120周年記念館1階 香雪記念資料館

「古筆切」とは、もとは一冊の本だったものが、書の観賞用に解体されて紙片になったもの。本学が収集してきた貴重な源氏物語の古筆切を多くの方に味わっていただきたいの思いのもと、展覧会が開催されました。



▲後光厳天皇や西行法師など、歴史に名を残した名手による書を存分に楽しめる場が用意されました。

来場者アンケートから(抜粋)

- 源氏物語をイメージでしかとらえていなかったで、「江戸時代の源氏物語」を聴き、全体を勉強してみたくなりました。(女性・60歳代・その他)
- 「源氏物語の和歌」で、歌の背景を深く考える視点を教えられました。(男性・60歳代・その他)
- 公家についていろいろ知ったり、香道のことを学べ、とてもためになりました。(女性・20歳代・渋谷区に在学者)
- 普段、お話を聞くことができない方々に接し、とても貴重な時間を過ごすことができました。(女性・50歳代・その他)